

三十年前の12月。私は、ビルマ（ミャンマー）の地に降り立ち、不思議な感動を覚えた。ビルマ文字。あの丸い変わった形のビルマ文字が、町中の至る所に書かれていた。バスの窓から見える看板の、その文字が読めるという感動だった。

私たちは、大阪外国語大学（現大阪大学）でビルマ語を専攻していた。クラスの女子7人全員が、ビルマに一週間、前後タイに1泊というツアーに参加した。当時のビルマは、特別なビザがないと入国できず、入国も1週間しか許されていなかった。初めての海外旅行。三年間本で学んだビルマを自分の肌で感じようと、大きく息を吸いこんだ。砂埃と汗が混じったような匂いがした。

旅の行程は、ラングーンから古都パガンまで飛行機で移動。パガンから旧都マンダレーまでバス移動。マンダレーから首都ラングーンまで夜行電車で戻るといったものだった。

ラングーンで宿泊したインヤレーイクホテルは、外観は立派だったが、シャワーも水しか出なかった。ラングーンのシュエダゴンパゴダは、金色に輝き聳え立っていた。私たちもビルマの人々に倣って、金箔を購入して功德としてそれを張り付けた。市場は人が多く、彩のきれいなロンジーやブラウス、竹で編んだ籠・バスケットのようなお洒落なもの、果物・野菜・魚や肉、なんでも並んでいた。その市の真ん中で、「ミンガラバー」とビルマ語で挨拶をして、私たちが日本から来たと告げると、あつという間に多くの人の輪に取り囲まれて、一躍スターの座に。びっくり。現地の食べ物や水は、口にしないようにと言われていたが、親切な瞳に勧められるまま、ボールに入れられた豆付【もやし】のようなものを「えい」と口に放り込んだ。シャキシャキとした食感。魚醤のンガピーイーだろうか、醤油味。「テイ カウンバーデー」（美味しい）と言ってほほ笑んだら、人々の拍手と笑顔。ビルマ人の人懐こい、優しい人柄に触れられた。幸いにして、私のおなかも大丈夫だった。

パガンへの飛行旅。初めてみるプロペラ機にみんな絶句。「無事、パガンの地に辿り着けますように」と祈り乗り込む。窓からプロペラが回る様子を眺め、「頑張れ、プロペラ。」とみんなでワイワイ騒いでいると、水平飛行に。ほっとしたところで、「一人ずつ、操縦室にどうぞ」とガイドさんのアナウンス。（ガイドは、大学の先輩）促されるまま、一人ずつ操縦室に。【絶景】の一言。窓からの景色とは大違いのスケールの空が見えた。

『人間の土地』のサンテグジュペリを想った。彼が見た景色は、こんな感じだったのだろうか。飛行機と身体が一体化して、鳥になった気分。無数の朽ち果てたパゴダの群れと自然が美しく織りなす大地に、飛行機は無事着陸。

砂漠のような乾いた大地に、赤茶けて朽ち果てたパゴダが点在していた。

パゴダの中には、蝙蝠の糞が大量に落ちていた。14世紀に滅んだまま、時間が止まっているのだろうか？この壁を当時の人が触ったのなら、私もこの壁を触ってみよう。彼らの声が聞こえるだろうか？ひんやりとした壁を触りながら、昔を偲ぶ。滅亡の時、彼らは、何を考えていたのだろうか。

階段を登りつめて、パゴダの頂上に辿り着く。息をのむ絶景。母なる川、イラワジ。悠々と静かに流れている。パゴダの外回廊に座り、イラワジ川に夕日が沈むのを待つ。

【静寂】なんの音も聞こえず、ただただ静けさのみが、パゴダを覆う。こんな完璧な静寂が、闇もなく存在するとは。オレンジ色のやたら大きな太陽が、音もなく山入端にゆつくりと吸い込まれていくのを、ただただ眺める。夕焼けに染まる赤茶けたパゴダの群れが、もの悲しく見える。イラワジ川は、昔も今も、変わらずこの地を流れているだろう。このように過去と現在を静寂で繋ぐ美しい眺めが、これから先もずっと続くことを願った。パガンからマンダレーのバスはよく揺れた。バスは砂埃を舞い上げて走った。マンダレーの近くで食べた中華そばは、日本の味に近く、懐かしい感じがした。

マンダレーからラングーンの夜行寝台電車は2段ベッド。4人掛け。朝の5時頃、どこかの駅に停車したとき、子どもたちの声で目が覚めた。窓の外を眺めると、腕にたくさんの花輪飾りをもった子供が、「ワン チャ。ワン チャ。」と駆け寄ってくる。ビルマでは、どの観光地でも、観光客目当ての子供が、走り寄ってくる。ストリートチルドレン。言葉では知っていたが、目の前で無心に働くその姿にどう対応したらいいのか分からず、戸惑いを感じた。子供たちの目は澄み、輝いていた。それだけに余計辛かった。「魚を与えて釣り方を教えず」では、子供やこの国の未来はないのではないか。ただ、今日の魚もなければ命を繋ぐこともできず。この問題解決は難しい。教育を受ける権利のある日本で学んだ私は、【教育】ありきは、当たり前ではないことをはじめて知った。「観光客が子供にお金やお菓子などをあげるのです、このような光景がよくみられるようになった」というガイドさんの言葉に、胸が痛んだ。

ラングーンに戻ると、ホテルに友人が訪ねてきた。チョーチョーホー。大阪外国語大学の客員教授の息子さんだ。奇遇にも、私と生年月日が一緒。日本とビルマという違う国で、

同じときに生を受けた不思議な縁で文通もしていた。フォルクスワーゲンで迎えに来てくれた。ビルマでは、経済格差は大きかった。しかし、その格差を人々は感じていないように思われた。日本から車1台もつて帰ることができたら、タクシードライバーとして、一生生活に困らないと言われていた。だから日本へ行くのは、憧れだと。もちろん上流階級の人は、高度な教育を受け、特権を手に行っている。上流階級では英語はもちろん、受験勉強も大変だと彼は言っていた。

ガイドさんに、村にも連れて行ってもらい、市井を垣間見た。豚や犬が走り回っていた。高床式の住居。雨露はなんとか凌げるかという程度の簡素なもの。階段を上ると、子供たちがいた。人懐こい、少しはにかんだ笑顔。澄んだ輝く瞳。なぜかこの国の子供は、みなきらきら輝く瞳を持っている。印象的。もちろんテレビや電話などはない。情報というものは、一切入ってこない環境。

托鉢のお坊さんのために、毎朝ご飯は炊くが、自分たちはその米のご飯を食べない。豆のようなものを食べている。家にあるルビーのような財宝もみんな寺院に寄付して手元にはもうない。それでも、みんな幸せそうに笑っている。どうして、そんなことができるのだろう。富を蓄え、豊かになろうとしている社会にどっぷりつかっている私には、絶対真似ができないと思う一方、彼らの生き方、価値観に惹かれるものがあつた。

【豊かさ（幸せ）とは何か】 日本は一億総中流と言われ、経済的豊かさと便利さを求めて突っ走っていた。バブルへの助走が始まった時期。経済的な豊かさ以外にも、何かほかの豊かさがあるのではないか。日本が進もうとしている豊かさは、本当に幸せとつながっているのか。言葉でうまく言い表せない不安を感じた。ビルマは、日本と同じ方法で経済的な豊かさを求めず、ビルマ独自の豊かさを追い求める方が、幸せなのではないか。身勝手にそう思った。それはきつとビルマの人々が、礼儀正しく穏やかで、笑顔で暮らしていたからだろう。子供たちの目が、不思議ときらきら輝いていたからだろう。旅の前後に宿泊したタイは、経済成長が著しく、急速な経済格差が見られた。ビルマとは大違いの近代的な高速道路、カード式でドアが開閉するお洒落なホテル。その傍らで、川で洗濯し、船で食料を売っている人たちの暮らしは、その経済の恩恵を受けてはいなかった。人々は自分の目で、その格差に気がついていた。

ビルマからタイを経て、私達は、合理的・効率的に仕事を進め、さらなる豊かさ・便利さに向けて突き進む日本に到着。経済進化のタイムマシンで旅をした感じ。それでも住み慣れた日本に到着すると安堵した。見慣れた景色が、少し今までとは違った風を感じたの

は東の間だったが、「豊かさとは何か」と自問し感じた不安は、頭の片隅に小さく残った。

この記憶の曖昧なビルマ旅行記を書こうと思ったのには訳がある。昨年12月に、一人のビルマ人女性と知り合ったからだ。彼女は、まだ23歳。話をして、私は、彼女の知らないビルマの景色を知っていることに気付いたからだ。彼女は、私がビルマ語を学び、ビルマを訪問し、ビルマを想っていることに感動した。そんな日本人がいることに驚いたのだ。だから、大学生だった私が、その時、ビルマで感じ考えたことを拙くても伝えたいと思ったのだ。ビルマは歴史のある国で、思いやりのある優しい人々が住む素朴な国だった。時間がゆっくり流れ、経済大国にはない「なにか大切なもの」を、大事にしている素敵な国だったということ伝えなかった。

彼女は、単身日本語を学びに来日。祖母の為に介護を学びたい。また、急速に外国資本が投入され、近代化に突き進むのと並行して、ものすごい勢いで環境破壊・大気汚染などの問題が深刻化。日本がどのようにして、その問題に取り組んできたのか学びたい。ビルマの教育にそれを活かしたいという夢を語った。

彼女の夢を応援することが、私の夢の一つになった。昔ビルマで見たような、人懐こい笑顔と輝く瞳を持つ彼女と出会えたことが嬉しくて。不思議な縁を感じる。止まっていたビルマとの時間が、また動き始めた。